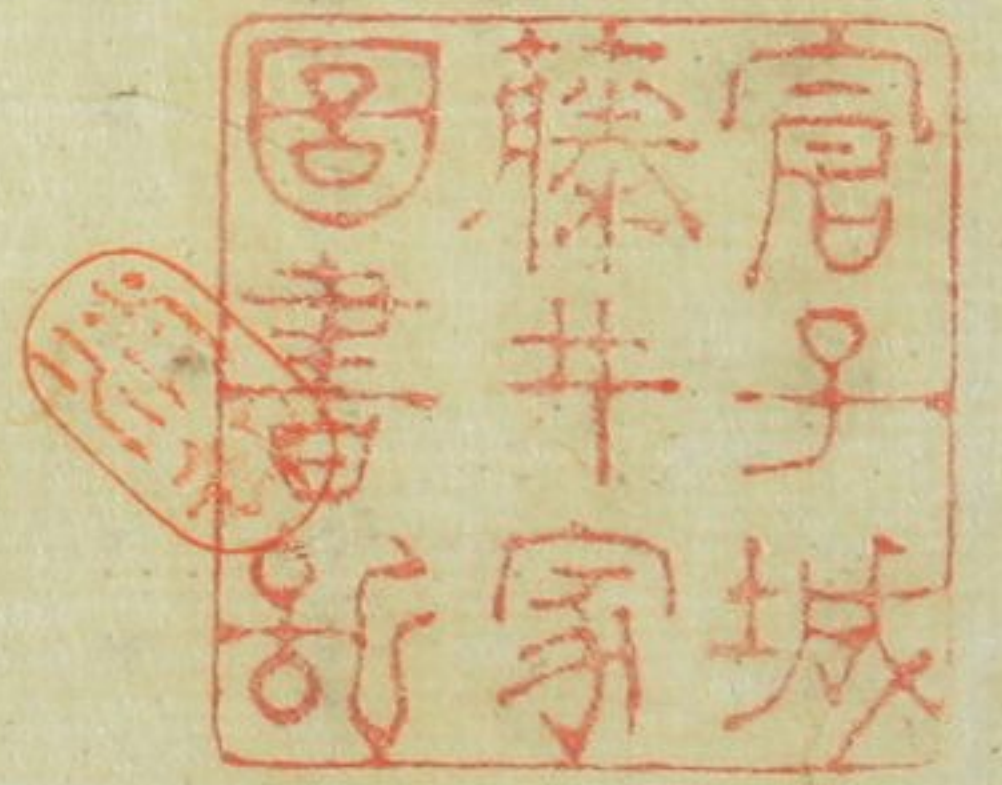




(主) 清堂入道敏は成寺と作しを終り毎日常に
 其ころ白犬と名して飼を多し其の供養も多し或
 日門を入りもやんし清堂よりするて走りながら
 やえたりいふもゆき終りてゆ後どらたさなる事か
 うりも終りて歩み入るもやんし大清直衣れ終らんと
 して引りもやんしいふも中よりとて櫛ぬらして
 清尻とけして垢終りて髪も時明ぬらして子細に作
 らるるに志づき眠く思惟するる氣色して尸中り君
 を呪咀しするもの厭物(きんぶつ)の物を道に埋て葬るを
 らんと擡(たか)へゆる也清運(せいん)やいづくなく志て此犬をえわす

乙卯年文正十

山崎宗鑑





いとふもとおもひてよん小神通の物なりとて其の所を指て
 ちくちく土器と打合て黄たる紙のりよとてすまに
 ちくちく紙ちくちくおこしてぐり解くるるよ入る物
 いかくして朱砂よとて一文子紙土器よ書り晴明よとて云
 此術いまいあつる秘事も晴明が外知者なりとて無道摩
 法師あつる其一人ぞ知ぐとて信常あつる鳥乃
 形とあるとて呪とてあつるやどあつるに白路鳥と成て
 南風りて此鳥乃落しゆん所公厭術の位而と
 知くしよきれば下敷被白鳥の行くと公守るとして
 行向六重坊門万里小路は東院乃ちた跡折戸れゆよ

落人仍被り求る在よ老僧一人有するつら搦捕てゆ
 情を伺つる道摩堀川の右府の諸を捕とわごとく由
 戸多終ども罪とわゆとて本國播磨へ送つらつと但
 ながくおのづこお捕つてさぶあうしおとわらふ是
 運のほく慮乃賢くおらうゆとわらうて此船をのづ
 まごせ終つてさうり

世 隆禪律師按察大印言隆季の法師道律師とて坊
 へりうらうる夜尼一人来りて大和公乃人とわらうが日
 常より又含物とまゝ今夜ははらうん含物あえさひい
 へといふれは含物とまゝてやうらうあま入る門を叩く

者わり使麻使也と云其尼サシ盗犯の沙汰よのりた
 ろ也ゆゑおれをこつして停ぬ是はよりて彼尼とまゝり
 る相侍をふおあまゝ判官あつてあまあて又門を
 叩く此尼を請うんとするらとて入れて隆禪とらう
 對面してさうら家より判官と名のる老隆禪とらう
 刀と拵く脚よりあそぬの勅さけさうらおねん坊
 中の人あまと出たさつして其程くわうらあ舎をど
 りのちて資財雜物若干運ぬて馬十餘とて負ふ
 尼公と隆禪と馬ののきて粟田のわくりてとれ
 ゆうとわらう各去らうら被奏始皇帝高衛離小ら

ら種く叙すのぞりりるの燕の園乃宮よぬきりて自
出相よりゆ人也隆縁を縁乃尼と情よ慈怒乃を
もゆりてうふ同ふあひくろあそあをゆけき未
乃まよそと能ゆゆんこせ

松津園兜屋寺くつふあり七十計あり法師乃一人
出あり鐘つと堂のそいれ住持の家わきまに宿か
アそとありいより二三日さひききとあはゆるなりけき
い自の住持あ中もていりあらんりのげく行どと回れ
と婦人れは師と中よりていげくへゆるぐとて思ひ定
ころ年より子にくいの男播戸園志くといふ西よ作

う世中と傳うく田池石領をともあまうおそいが妻に
あひ女乃ゆぐ人もあひあよよりておんぐとて思ひ
うれ出ても也不慈いりて思ひて鐘をぶらんとつ
せむやと云此住持さしかりんとてして止をいりか
十日計るく此法師ねあよけすくそかりけきあ
ゆりゆりて寺中されぬぐとけきぶよりれ法師
とて思ひくち中とけきけきよとけきあひるる
て住持を打鳥帽子とて男乃後者二人計具
しころが尋より此寺ありて思ひは師をぶらあ
まやかりいりて鐘樓のうりりちるるを

法師の日いざら素す有あはるらが此これ曉あつさるるく脚あしかく答こたへは此これ男おとこも
多おほ打うちらうくくいいやや此これはは師しのの我わが父ちちももてていい親おやぢぢががううままいいが
みみくく我わがりりのの近ちかききももてて見みてて死しののうう親おや一人ひとりををくくままりりふ
ままじじきき身みももてていいりりぬぬよよかか乃のちち一いつののぬぬにによよりりたたりりて
いい不ふ思し後ごのの死してていい今いまののいいようよういいききのの人ひとがが葬まうす送はははいい
づづ一いつととてておおくくいいららうう方かたよよ成なりくく業ぎよ馬ま走はしららぬぬくく口くちぢぢ中ちゆう
人ひと斗と具ぐ本ほんままくくいいりりりりたたくくれれいいりり寺てら中ちゆうのの此これ死し人ひとととりり見み
ままままままのの坊ぼくををささててくく人ひとととててああぬぬ同どうくくううららやや此これ僧そうのの物もの
ううららののををてておおくくいいぬぬととたたたたふふおおぬぬくく人ひとれれどど此これ
つつととぎぎのの先さきいいららふふ不ふ思し後ごううれれととおおももいいてて葬まうす送はははれれぬぬ

ををたたれれいいづづままがが縁えんいいららくくてて教おんののおおままりりととくくやや取とりりてていい
みみくくりり臨りんよよおおののれれととぎぎけけ強かうううらららら彼かねねああるるととくく言いふふ会かい
佛ぶつととるるととそのそのままががれれいいららううのの死しののううととてて死し人ひととと埋うらむむ
よよととととららららけけりりゆゆちち死しををづづららとと也や

三三中ちゆうははよよううららきき人ひとののいいららううとと禪ぜん師しのの若わかしこききりり字じ同どう
行ぎやうととりりままをを何なにとといいふふとといいふふかかひひななににままるるええとと人ひとおお
ままににななららししてて師しののももややううららとと常じょうのの音おん行ぎやうととてて乳にち母ぼ
ととままいいままじじぶぶいいららううととああくくててつつととくくううららららんん智ち家けのの
まま同どうかかららううららううのの婦ふよよいいららとと師しののいいぬぬとと人ひとれれ
りりんんななららししてていいららううとといいままららししままららししつつとといいままららししつつ

賀者より事^ひに言^ひたりしが方^はけさる^る由^は地^はしてさる^る程^はも
 世^に中^に物^にさ^はじ^つて定^まる^る中^により言^ひ入^るものぞとさる^る程^はも
 たうらとけきこ^に事^は中^におと下^りあ^らは^しき^き事^はして^はた^ま事^は
 ありける程^はも中^により^し年^のころそ^はに^も成^らむ^べし^に此^に禪^師
 のり^の人^もく^け何^れか^くほ^ごれ^あら^しむ^かざ^らむ^かざ^らめ^のあ
 とめ^ま事^は禪^師ま^てた^かか^られた^ら侍^のあ^らま^はし^め此^に禪^師
 忍^ずみ^まづ^のい^しま^ま事^はかり^しい^まれ^ば縁^のう^こり^しめ
 て尋^問ひ^まい^らふ^まづ^のい^しま^ま也^は善^哉君^として^は高^人
 の性^者と^りて^まし^きま^{して}い^まづ^のい^まふ^一は^宮仕^をも^てせ^さ
 と^はさ^らい^かげ^と世^に中^にお^とす^るて^は中^にの^縁も^もち^まら^ば

今^いま^もあ^らな^くは^なく^は海^人僧^をぞ^わか^る人^として^はさ^らば^も
 以^てけ^りぞ^もあ^らな^くは^なく^はい^まは^じけ^りて^はい^まに^も二^三亦^は人
 ぞ^も下^に傳^へま^し今^もも^たな^くは^なく^は海^をば^らう^もふ^かい^しもの^も
 い^まに^は此^に淨^土恩^をも^てさ^られ^る馬^一は^はま^だて^てお^まり^し也
 い^まも^もか^がい^まに^もい^まに^は此^に禪^師年^はは^は中^にに^は禪^師が^いつ^る
 也^は也^はあ^らう^とい^ふ佛^教に^は淨^土あ^らう^とい^ふ義^はく^しめ^るも
 沿^うう^とい^ふも^もい^まも^も作^るも^もゆ^くも^もい^まに^もい^まに^もい^まに^もい^まに^も
 わ^きつ^らい^まも^も結^りん^まん^人目^をい^はす^一う^ちの^中に^は
 い^まに^は此^に色^はい^しる^もも^もす^のり^をも^もめ^く海^にして^は其
 極^いい^まに^もや^もた^らせ^とい^ふに^はい^まに^もい^まに^もい^まに^もい^まに^も

あつとを人目いづはゆはくあせといひたれはう終はゆ
車は後よりいづとをうてこそわらふ禪師の云ふ中
目はわらふとせんと思はれりてあせわらふて術ありつるふ
牛車より人違へ下を思ふに付素とん奉申らう
終くきしてけりあをり程了り終束して此侍よりぬ
寤れまの僧は此奉終よりたれはりぞとて終りて候多
由領ありいされいづく中びしあをきとるをまのい新取
あが終りてはゆいひたれはゆはよ及ぬ決身也と告て
此賀衣よと終りてあ終りといつ候待りてたれ身よと
付まはゆあ不使の奉りたり今いづくはくゆらと奉

うらと問ふは登をどうらとそく桂さんととらよらうの田
上よりうらねくゆせめていづとせとあんとといひ
あ終りて女中とゆへとせんとてあをん云奉りあ終り
いづとせんそと出まら女中をそくせがくといひ
偽のあはれぬ終りまきけきわの契かちうと本乃ま
禪師と人乃子かりたれはのうとあがうゆとがんあはれま
あがくしてあふくに我身のわらふとあせとあ終りあり
ああ川流るあはらう白波のよる方もれとあ終りあは
くあはらうあをくはてはあとあ守のた九白れ又方さ
あはらう車に雑色牛飼をどさりやうにて此侍具



多たたあぐやま入り後師匠に於て専らせむごとくして
 ありてくつて見れば人の形をまごへかかろうかろうとほよ
 中をけりるふさうわけておとのかよはたやうんき向
 ひらりもほのりきまうまき事のものれは宮位（まつかゝ）志々れば
 人まればろくおせしおとくごうり家名はくし領（しやう）わむ
 方おまををれし続びつぞうりてなまごうぶ美を思て
 此家乃（まつか）能（よ）文（ぶ）を（び）信（ぢ）とて人の物候うらるといひ
 之あつしひより程く此家主侍よえうらは正月もさ
 れいつとれくから（くら）くものこいつとねくゆと漸由その
 由不（よ）ふとてあまをそあまをそせよをまうとていひ

これに此侍のいづるを和清の房の吾下にも目とちね
ふらうか何某ちの人やいあらはせ世中よりやうなる
のらうまつしきは我も也由あてしをばしませぬ娘ま
づこころもさきも終らぬ世中をわん換じてあひす
人もの事ことごとくやうにわらうとていふは月夜に
世ごとくささんとうゆらうぶかしくそのぬいさかど
けごごんしやうしあまよとて由あて侍と舞うか
でい物ぬらうめとあやちやう

⑤成方といふ笛吹かきより清堂入道殿より大丸と云
ふ笛吹き吹くまじでうた物をいば侍は修理の末後徳

柳花のうらと千石のかりんとおもあらんうらとさうと
あばうて使とやうて賣ぶまようといさうさうぶら
ついつまて成方成方と笛えさきんとつひさうあきと
ねくあといのいよぶとそといひさうめおらんやとい
あきと成方色成方とてさう事やうさげといふ此使
を右じんとく君とねくう海とさうさうといつあま
後徳とさういさうと人をあまじとさうといひさうと
うら事とて難也あうとて本馬ののぞんとさう
同成方と身のいさう成方とて此笛吹かきとさうだ
といひあきと人をあまじとさうといひさうと帰来と勝らうと

按出くつの中し此故よき世の中目いんれ情をた角也
として群のりふやうしてる故あり炭のぶくは打搦つ
たま角故さんともよん乃深きんそとさほぐかま
ち執今いりういさけきびりまじらんに及ぶる一
進放りうり後うきけいあぬ角故大丸とて赤權
とて卒の大丸いさくゆりまればたまのたこぬ
ちやちいりうり始いゆくともやうらうらとてま
ゆりうりうりうりうり

⑤昔趙文王和氏璧をめぐりしときり秦昭王ついで此玉
をえそいづれとあいて使をけりて十五珠と分て

むらうんとすの趙王大う歎せうく蒲相めを使して
珠をもちをそ秦の中昭王うらぬくさんたえんとも
せうりちまはけりうりまはけりてけりまのんま
がはは此珠とる幸あつていついて珠を奪く後像
うりうりる色をけりてけらとあつみく玉をけりん
とす何り秦まゆりてうりまはけりまはけりまはけり
まはけりまはけりまはけり

⑥漢高祖の長張子房黄石公が書書けりてまなと
まして項王とあえりうりまはけりまはけりまはけり
を帷帳の中いぢりて勝事と千里れおにまはけり

幸我子房はちるはく也張良が一巻の書に三不の師傳
一書といはれ孤書とすづく子房にうきづくは田草牛と
放り江廻船つゝ終一皆軍のぬづらと也秦は惠王蜀
の國然とて人々終つる道終て人通ふ境よりわづら
しるるもあはれぬわづら石の牛と作て牛の尻は金をと
るはくはもくは境のまきとてとてとて蜀國の人
此牛とてとて石牛天下より下て金取らるるこころに
別ふ人れか人をしては孤城牛と引よわづらとて牛
うあり及よぬ秦相張儀を信りて石牛の尻は
見く蜀國を打ぬくろり

① 迤比唐は徽宗とて帝れりつら此國の島羽院中
清海をいぞあつらふは彼帝れ中を思ひて道出は
本ぬけて佛紀を失れりつらこの國のくこちやあ
とらへる人乃公われはあそ人とて云ふもの都は外とて
物をわとてあつらひるる孤帝をうとてわづらとてわと
人を王宮よる入くはとてくわとてかきせ終あれた人ぞは
帝は迤比をりて中本とて義りけり利はあつらつら
を孤をのづら悟つて都とてくれとて終丹とて國育
金取らるはよりよりとて金とてみる日本はあてはみ
らの必あはれぬはねはあけは金取らるる國あり具

不^レ王^レ王^レを^レま^レけ^レ謀^レ賢^レを^レわ^レれ^レ人^レが^レさ^レわ^レりて^レ帝^レの
中^レを^レ思^レて^レ財^レを^レあ^レま^レり^レ積^レめ^レ格^レと^レめ^レら^レる^レら^レ彼^レ王^レ謀^レ
及^レを^レお^レこ^レさん^レと^レも^レ付^レけ^レり^レ大^レ金^レへ^レさ^レら^レれ^レい^レ三十^レ日
さ^レら^レり^レ道^レを^レり^レく^レ積^レど^レ是^レに^レ大^レ道^レと^レて^レ國^レに^レお^レり^レき^レ
遠^レ也^レ澤^レん^レび^レき^レ家^レに^レさ^レり^レよ^レい^レ七八^レ日^レさ^レら^レん
り^レと^レも^レや^レ道^レの^レ進^レも^レま^レど^レ虎^レ狼^レ多^レく^レて^レ人^レの^レお^レり^レん^レ
道^レの^レや^レり^レふ^レ千^レ両^レの^レお^レあ^レり^レし^レも^レあ^レり^レ青^レ大^レ福^レ長^レ者^レ其
不^レり^レ積^レて^レ金^レを^レあ^レと^レ埋^レへ^レお^レり^レの^レお^レり^レと^レも^レ付^レけ^レり^レ
大^レ金^レ乃^レ王^レい^レら^レふ^レ商^レ人^レあ^レら^レう^レと^レ謀^レを^レ先^レと^レり^レて
金^レを^レ多^レく^レお^レき^レと^レ帝^レに^レま^レじ^レと^レ帝^レ是^レに^レり^レり^レる^レ金^レを

と^レ尋^レら^レぬ^レ大^レ金^レより^レこれ^レに^レ千^レ両^レの^レお^レあ^レり^レし^レも^レあ^レり^レ
ひ^レら^レ長者^レの^レ金^レを^レ埋^レり^レと^レも^レ付^レけ^レり^レ是^レに^レゆ^レり^レて^レ謀^レ
堀^レを^レ自^レ得^レる^レと^レ帝^レ感^レじ^レり^レり^レて^レ搜^レ求^レく^レと^レま^レ
づ^レと^レ作^レる^レと^レい^レひ^レら^レり^レる^レ帝^レを^レさ^レら^レり^レて^レ終^レり^レ
大^レ金^レの^レま^レじ^レを^レ彼^レ金^レに^レ埋^レり^レし^レ此^レ王^レの^レや^レり^レと^レ
い^レひ^レら^レる^レもの^レが^レ多^レく^レ人^レを^レ引^レ引^レて^レ金^レを^レさ^レら^レり^レと^レ
は^レら^レり^レも^レあ^レら^レん^レが^レた^レら^レし^レ切^レ拂^レく^レ大^レ道^レの^レお^レり^レ
ふ^レら^レり^レの^レら^レり^レる^レと^レら^レて^レ大^レ金^レの^レ王^レ徳^レと^レを^レお^レこ^レ
し^レら^レり^レ由^レ推^レ察^レと^レも^レ帝^レの^レさ^レら^レり^レと^レも^レあ^レら^レり^レと^レ
を^レの^レく^レ吉^レ道^レに^レら^レり^レ大^レ道^レより^レ向^レり^レて^レ道^レを^レあ^レま^レり^レ日



くらりとして都より兵がきりぬけたりといて大金は王も
 相具して今作らる道よりくらりいして王も入る帝と
 取守りて大金へ歸らぬそのら法も皆大金に随
 細細とけりきて濟物と弁は彼帝先の跡にけり子
 乃世よりぬく大金とるに教は同女をよりくらりけり
 わらよに世の勢場つてえおとるごとく二百六十の
 百七十のりい大金よ打ぬく強而九十と帝とるを
 立基山長安城をぐる所彼大金よ打ぬく終り是
 ふよりて今世代の帝は都よりけりはるを府と云明列
 より三日ぶるくらりくらりの中は長安の帝は田舎

くは終るふいさひきこむと府の始終もつちたれ也日本
の府二所あり筑紫と陸奥國との鎮守府を宰府と
多あり唐よりはう中れ府國のあり今後多あり其
府一也蜀江とて錦江とて詩奇に作れあり日本とのま
たその中れいらくいつたてく人も通るふありて其の境を
大金より領するともやめふ世にば字同きとる人の扱
のありてり筑紫よりきんづとつる者瓜帝もは仕官位もゆ
ふさるれば大長とて相服とて我國の穿れ直衣の中
から物とてきくから中るれば馬より打あくるものも
しめしわれば王宮れから格じりのれ後よりつうくわと

ゆくさるるちうのこまに以上古瓜國より趙高の二世の代
さうどつんとさまらるる麻瓜とて馬とてまうて身は藏
勢の程をわらうる句張の呉王のいはい瓜瓜ゆりて會稽者
り私とすしぐんがふあにゆるとよくさうふはとみせ
しゆとて其ゆらうとのちるとるち格とてつれはとんと
つらとるとらうる也あ帝あるふして彼公の内瓜とらう
りて後より色び終るるり神とて人をけらるとあつらうと
あつら漢家日域とのありすあつら瓜瓜より樂府よ
りあつらしてけらとらうととととととととととととと
わあつらとらとけらとらうととととととととととととと

九
七

ついでに戯たがれてもあてをさあつてさうもやせんや我はう
 りん人のあつてのんきりな今をさういふさむいさむいさむい
 ぐれうらぶとあつてやうなれ方の福徳丈相圓うらやま福門ふくもんの
 一のうらぶ人もやうあつてさうもさうもさうもさうも
 戯たがれとあつてさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 さうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 けさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 ど冬ふゆさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 とつてさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 ふうりうさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも

うれがさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 めてれさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 一やさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 人のさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 覚さちうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 香松かしょう大徳だいてくの房ぼう子こ かとう
 廿六 九条くじゅうじょう民部たみべの形かたちのりんわらな彼君かきみを逢あはさうも
 多おほ進しん徳とく司しのさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 奏そうし給たまへさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 わらん何条なにじょう進しん徳とく司しのさうもさうもさうもさうもさうもさうも
 片かた方に長なが給たまへさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも

九
次侍らふ奉^{そと}し侍らばこのかどよりり奉りてめんかくて
侍らむい^{かん}く便^{かん}き侍りて笑えよとわらば侍ら^{まじ}侍ら^{まじ}に
りせよの年高く成給わらん何系近侍司ら給は方
し出家うらして居多しとれう^ききうあがら御^あみ御^あみ
侍ら奉りてと作と云此人あらくさば侍りてあをよ
まけしと云も世の常執^{つと}りやはきりしうあがてあひたり
侍ら^{まじ}侍ら^{まじ}に奉^{そと}意^いき^きと^まは^まい^いや^やて^て出^い家^けして侍^{まじ}侍^{まじ}ら^{まじ}ぶ^ぶ
侍ら^{まじ}侍^{まじ}ら^{まじ}い^いも^もあ^あま^まの^の侍^{まじ}り^りと^とわ^わら^らば^ばま^まの^のま^まこ^こ
み^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こ
あ^あら^らく^く侍^{まじ}の^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こ

九
うそい^いる^る御^み王^{わう}大臣^{だいじん}の^の侍^{まじ}奉^{そと}り^りと^と内^{うち}へ^へゆ^ゆら^らあ^あり^りの^の公^{こう}乃^の
乃^のよ^よの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こ
く^くわ^わら^らあ^あり^りの^の侍^{まじ}奉^{そと}り^りと^と内^{うち}へ^へゆ^ゆら^らあ^あり^りの^の公^{こう}乃^の
の^の侍^{まじ}奉^{そと}り^りと^と内^{うち}へ^へゆ^ゆら^らあ^あり^りの^の公^{こう}乃^の
け^けい^いの^の侍^{まじ}奉^{そと}り^りと^と内^{うち}へ^へゆ^ゆら^らあ^あり^りの^の公^{こう}乃^の
ま^まの^の侍^{まじ}奉^{そと}り^りと^と内^{うち}へ^へゆ^ゆら^らあ^あり^りの^の公^{こう}乃^の
う^うの^の侍^{まじ}奉^{そと}り^りと^と内^{うち}へ^へゆ^ゆら^らあ^あり^りの^の公^{こう}乃^の
あ^あら^らく^く侍^{まじ}の^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こみ^みま^まの^のま^まこ^こ
侍^{まじ}奉^{そと}り^りと^と内^{うち}へ^へゆ^ゆら^らあ^あり^りの^の公^{こう}乃^の



先二条三位経威の御よ梅花りてさへ嘆きけりけり
 源三位頼政は前と通るて車紙とて知て忠の外よ
 ちくちくはけりて云入るりたる紙云つこの侍は三位殿
 ちやいさいざりぬりありて侍りや中も終りぬ侍ど
 ちくちくはけりて対面して侍りや中も終りぬ侍ど
 侍の席はけりて侍りや中も終りぬ侍ど
 侍はいつたり此侍君が来ませ侍と云お奇とて不知き
 侍りや中も終りぬ侍ど侍りや中も終りぬ侍ど
 宇治殿二と云ぬ紙侍りぬ侍りや中も終りぬ侍ど
 侍りや中も終りぬ侍ど侍りや中も終りぬ侍ど

免しある由けりして備へて事候とてさうけしむは
齒二枚されし事候をれば由ゆ返事候に奏せし候に
と一乃不也候に

③七条の南室町乃東一町いあるに後輔親が御也
丹後乃天橋立候事候にて池の中橋と違ふに候て
小松を長く入る候に寝殿乃御所底を二月の迄
いまいとせしけり候に春乃始朝らうた梅をさし寫
の定りて已時分ある候に候に候に候に候に候に
をせし外の外の外の外の外の外の外の外の外の外
うふ事候せし候とて告あざりしてあとの辰乃刻に

う候てきり候人多くとされしにて伊勢武者乃直宿
してありしに候に候に候に候に候に候に候に候に候
穴のこ驚あざりてゆれとて候に候に候に候に候に候
はらひしに候に候に候に候に候に候に候に候に候に候
して候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候
より辰刻より候に候に候に候に候に候に候に候に候
驚あざりしに候に候に候に候に候に候に候に候に候
たし候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候
まの此男をよび候に候に候に候に候に候に候に候に候
まじり候に候に候に候に候に候に候に候に候に候に候

とていふて侍るは帰もふいつら間存とらうとて
え免しとていひつるさとしとていふとていふ
とえぬ事とれとていふたより枝よ當然ゆつとて
りて事わつちとていふとていふとていふとて
くいとらうとていふとて昨日の作らう當中らうとていふ
つらうとていふとていふとていふとていふとて
うとていふとていふとていふとていふとて
まらうとていふとていふとていふとていふとて
つらうとていふとていふとていふとていふとて
えらうとていふとていふとていふとていふとて

えつらうとていふとていふとていふとていふとて
ふたどいふとていふとていふとていふとて
④ 白河院鳥羽よわつゆらう付水面乃者たに受領
國へ下はちのせきとて侍候あるべしとて國司よは玄蕃
頼いさのりとていふ者たてて衣冠よとていふとて其
外立位くハ茶駈せきとていふ各綿唐綾とていふとて
らどとていふとていふとていふとていふとて
らうとていふとていふとていふとていふとて
人の家よ入く後者とていふとていふとていふとて
ふらうとていふとていふとていふとていふとて

うかくい種をたよやと辰時とあせ催しひかりのうさき
定午未よいけんとどろん物をととくはらわけ居る門の
方より移してあられゆるしつる物くすつりごとく只ある
物もとととあぢふま番頭こくしの圓司乃染しねくうつる
物か友た備門殿かきの錦とまきう源兵衛尉かきの継物た
金の文付くわくわくわ中くゆがえくやをれく
ぐ此こそあてえけり男おあてて大さかざうりの足物
いつど賀茂まつの系も車うりく何ともゆがえい
院乃清しみず棧敷せんたきのあつこくわい給つるさほ目もあう
も及びいつどとえけくうふとくつばらやうりていあてい

さきといつふまをけあめぶといつてこのいつから事
あつらんまてくそてあていど目もあては終くあてく作
どろくことえくことくつういもあてくこと進ま
不承通ふじょう奇姓きせい也きくらんらん巻まきよと作下されてた白
余いころやふ此治身とせあてて目もあてくさあてて
ゆるとれいころるころ候まうとらんらん巻まきよと作下されてた
うらまてあのみかきくはきくうらあて人おれい
へ志しころんらん敷しきとれ物ぶふ執ししころんらん巻まきよと作下されてた
中ちゆうのしん振しん舞ぶべーべ時ときとていあやまらとせりてけいし足
不承ふじょうの立居たてゑく失錯しつさくあうるべー身よい火おとく

くつて人の物と云がしつてもさうた人希うてはさつげる氣
 色しきの中なかもつらわらぶしおとさうくつらむど物あつて
 いざわくれいざわくれ程ほど便べんなるものれと云つては清少納言
 の枕草子まくらぐさこといふおよつらひ人けりかなるものくまれさ
 めぶさ女房にようぼうちとわいて物送するふお乃の深ふかなる雨あめ乃
 ちりなまやとてなまじれど云つてや其まのむねより
 下したすかろせき守まもりぬらさめれ女房にようぼうよりだうだまの射
 面かえの存ぞん存ぞんして後のち者のこぼくくけりてふいひてん
 ぐれぐれま車くるまなれびとてとこのゆれどおまをんたに告
 ちちもきばんとへ入いらふいふいふふふとてよくまきぐんを

げりしんげりしんさき車くるま也

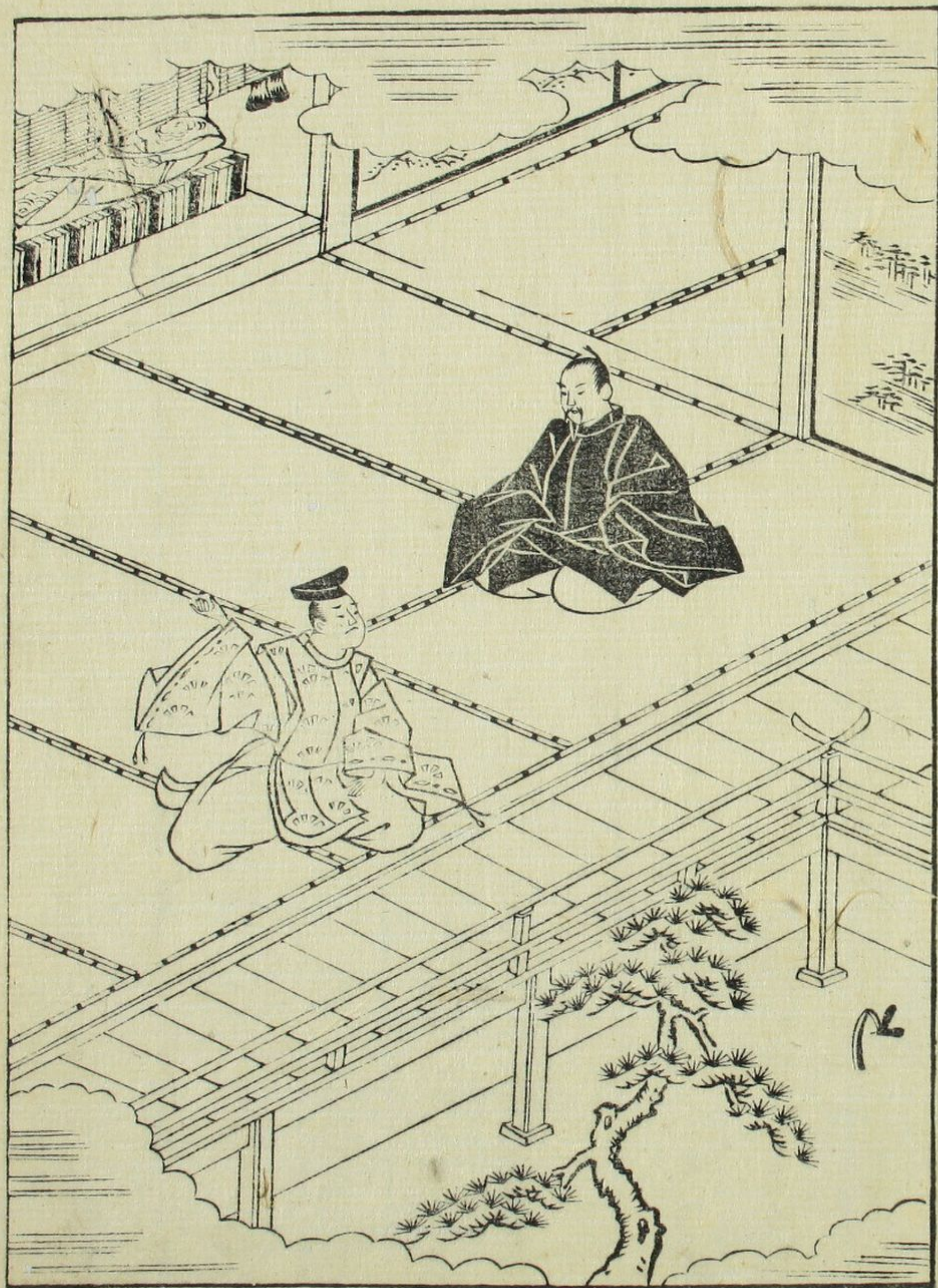
香後女房子 小許まな

世よ一いち大だい宰さい大だい武ぶ高こう遠えんの物ものおつけり道みち了りょう女房車にようぼうくるま伝でんなり
 多おほくさくさ牛うし飼かひ童どう部ぶれれのういふか伝でんしけりと同どうて彼
 車くるまとててて見みゆなもれはなる殿とのんと人の車くるまと女房
 車くるまのうらと物もの諸しよとて色いろけり物もの衆しゆのわくさて道みちけり
 くから伝でん腹はら立たちわらさる大武だいぶまきなるは女房にようぼうより車
 つすかどの人ひとなれどまのうらもさまののささけちれたるの
 せもなれどそのまが不當ふたうにませとて牛飼うしかひをいふと
 らせたまれし人ひとちりりけり我牛飼われうしかひより此女房
 さいばいませも作つくらまんとまきかいてはくさるまを

物々忠々ねがうに可也此故^{せん}や保信僧都四十一ヶ條
紀請^{きせい}第十^{じゅう}段^{だん}雖^い有^あ不^ふ叶^は公^{こう}事^じ思^し忠^{ちゆう}全^{ぜん}不^ふ記^き嗔^{ちん}志^し心^{しん}
ありくしべ聖教と訪^{まう}七^{しち}賢位^{けんい}の中^{なか}に忠^{ちゆう}法^{ぽう}位^いた^たて
六^む段^{だん}の中^{なか}に忠^{ちゆう}身^{みん}法^{ぽう}位^いと稱^{なづ}し^ち地^ぢよ^よの場^ば忠^{ちゆう}地^ぢた
号^{ごう}し^し證^{じやう}果^{くわ}と^とば^ば無^む計^{けい}忠^{ちゆう}と^と云^い釋^{しやく}尊^{そん}と^とば^ば終^{しゆう}忠^{ちゆう}と^とも
法^{ぽう}を^をも^もする^る羅^ら睺^ご羅^ら尊^{そん}者^やの^の忠^{ちゆう}身^{みん}才^{さい}一^{いつ}たり^り此^こ故^こや
唐^{たう}の^の多^たの^の直^{ちやく}と^と忠^{ちゆう}と^と云^い又^{また}忠^{ちゆう}身^{みん}才^{さい}と^と云^い守^{しゆ}ふ^ふし^しる
人^{にん}才^{さい}を^をり^りあ^あは^はわ^わさ^さし^し軒^{けん}よ^よけ^ける^る化^かたる^る事^{こと}まで
と^とか^かふ^ふ名^な法^{ぽう}位^いと^とば^ばさ^さら^らい^いと^と申^ます^すと^と申^ます^す中^{なか}に^に
雪^{せつ}の^のよ^よわ^わる^る事^{こと}と^とも^も申^ます^す為^な忠^{ちゆう}身^{みん}才^{さい}と^と云^い又^{また}忠^{ちゆう}身^{みん}才^{さい}の^の彼^か

靈^{りやう}草^{そう}六^む回^{かい}名^なよ^よ通^{とう}ぬ^ぬ君^{きみ}瑞^{ずい}草^{そう}と^とい^いふ^ふと^とわ^われ^れば^ばい^いふ^ふと^と
ら^らわ^わる^る名^なは^は彰^{しやう}よ^よい^いわ^わる^るは^は法^{ぽう}位^いの^の加^か刀^{たう}杖^{じやう}瓦^わ石^{せき}念^{ねん}佛^{ぶつ}故^こ
慈^じ悲^ひの^の文^{ぶん}と^と彼^か草^{そう}に^にせ^せく^く寂^{じやく}念^{ねん}が^がよ^よあ^ある^る
不^ふ怪^け不^ふ乃^のの^の公^{こう}公^{こう}江^{かう}以^い言^{げん}が^が詩^しよ^より
真^ま如^{にょ}珠^{しゆ}上^{じやう}塵^{ちん}厭^{えん}禮^{らい} 忍^{にん}辱^{じやく}衣^い中^{ちゆう}石^{せき}法^{ぽう}縁^{えん}
五^ご郎^{らう}中^{ちゆう}將^{じやう}の^のね^ねも^も名^なの^の事^{こと}と^とあ^ある^る奇^きれ^れ詞^しも^もわ^わら^らま^まく
周^{しゆう}防^{ぼう}内^{ない}休^{きゆう}が^が我^{われ}の^のま^まに^にお^おく^くた^たつ^つ事^{こと}も^も筆^{ひつ}跡^{せき}も^もゆ^ゆじ
花^け園^{えん}た^た大^{だい}に^に被^ひ草^{そう}れ^れも^もな^なら^らず^ずけ^けく^く公^{こう}の^のま^まに^にあ^ある^るに^には
く^くん^んと^とわ^わら^らず^ずも^も何^{なん}方^{ぽう}に^につ^つま^ませ^せも^もと^と捨^{すて}た^たら^ら草^{そう}れ^れも^も也^や

五郎中將のねも名のこととある奇れ詞もわらま
周防内休が我のまにおくたつ事も筆跡もゆじ
花園た大に被草れもならずけく公のまにありに
くんとわらずも何方につませもと捨てたら草れも也



①大納言の成りいまで殿と人々をばくしける何実方中將
 いふある憤り中をせん殿と人々をばくしける何実方中將
 乃冠衣打落しく小倉よまげ推くわり行成少とささか
 びしてそのものも司成多うて冠衣をまはして冠して守力
 ようしむがいのあつて殿と人々をばくしける何実方中將
 ちる事うして中の人をばくしける何実方中將
 ちる事うして中の人をばくしける何実方中將
 とちとちうりくいとれり實方の志をそとあげぬあり
 ねしと中將よりまじりて行成いひつゝとささか
 かくをそとれとささかんととささかと思ひざりしうとささかのまじり

藤人頭あきつりけるふ多の人を越くみされしあり實方
をい中將を先して前枕こゝまくらとてまれとて陸奥國むつのあがはる
されたる中將をかこして先こせのより實方藤人頭よあられて
中ちゆうのより返恨うらみとて執しやくとまりて雀すずめとぬく殿とけ小量盤こざいばん
より居ゐく其量盤りやうばんとぬいあらう一人といり一人のり悉
けよりて前途ぜんど返恨うらみ一人の悉しやく候こうとるによりて廢わづらひは
みあへふ多と人たり

公教の大相國実行法
二 三條の太長たながはゆくと小客人せうかくはゆとできよりけるに隣りん母
たながはゆと通きん
公重こうじゆうおれあつれりけるが此般こはん候こうと物もの公こうといわぐりて
大けぶとて打うちたる傍かたわらの格子こうしといとせびくしく打うちたる

かくは客人きやく人にん氣き色しきえきけるふ人をむとてきり打うちとて同どうを結むす
者もの種しゆの隣りんのおれけりふとまはとがらと打うちとてけしむ
うち悉しやくとて客人きやく人にんの心こころをわやまらむとて出でく候こうとて
我われも引ひ入いれり又またほみ打うちりたるに賢けんくぞとげり打
ついで是こゝのいふとがあらし終しまつと物もの倍ばいとてせと
上かみ藤ふじのうへをきかんとつみくおがさるし人ひとなりと
其客人きやく人にんのふいり人ひとの世よよの不ふ覺かくよおひりりや
そつとてまえまう此般こはんのし下したに道みち公こうのねとて候こうと
りや高たか極ごく大だい細こ言ごん雅みやび候こうのいみく版ばんあつていつれく
と公こうといつとて怒いかるとねくけりよのい終しまつりける人也

三 高湯院の姫君と申し鳥羽院の法師とあり美福門院

乃由殿也此宮に由るとして其由先とあるものよりい

うけりあはれを給する宮の内には歎いぬらん方か

らと有り由りごの後人々集りりくふみとの内は柳

と人のちかく氣色は見えざらと有り陸奥大納言いよご殿

と人お時あつれりけりけりけりけりけりけりけりけり

かといえれり物狐歎くも悦もまき色よもてあまふか

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くて男女あつびわたり候りあつる候とばすてくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

方いひみりさきあーやどー

四 西の法師男たるをける付くけりく志あらしめと先乃

と口ごりならしけるが重くけりけりけりけりけり

少院の北面の者ども弓射くわきびあつりくくく

をいれてあまげのちりくくくくくくくくくくく

く物公さくゆれくれいひあつる人の何れも忠いれど

は仰いよと男とて源次名衛尉とてありあつるに目公

合て此事あせ院とて打てて人にもあつるにらつと

なく柳の氣色もあつるであつりくくくくくくく

あ住ほふりけりけりけりけりけりけりけりけり

あ住ほふりけりけりけりけりけりけりけりけり

なまの精舎情子俗名龍清

堀川院皇子

中納言長安具

中納言長安具

温^{あつめ}忠^{ちゆう}ぶ^ぶの^の歎^{なげ}也^やを^を公^{こう}も^もと^と志^しづ^づめ^め人^{にん}の^の何^{なに}事^{こと}も^もく^くれ^れく^く
 亦^{また}一^{いつ}の^のめ^めや^やれ^れ志^しづ^づめ^めの^のあ^あま^まぐ^ぐ物^{もの}歎^{なげ}く^くる^る勢^{せい}守^{しゆ}の^の膝^{ひざ}
 里^{さと}も^もく^くれ^れく^くの^のせ^せり^り多^たく^く人^{にん}と^と笑^{わら}ゆ^ゆま^まど^ど一^{いつ}日^{にち}二^に日^{にち}あ^あど
 ろ^ろの^のま^まど^どほ^ほは^はさ^さら^らも^もど^どあ^あつ^つる^るの^のま^まど^どに^にあ^あら^らぬ^ぬあ^あを^を
 わ^わさ^さほ^ほく^くけ^けま^ま又^{また}女^{によ}の^の物^{もの}移^{うつ}る^るも^も同^{どう}づ^づく^く悲^{かな}び^びけ^けく^くま^まじ^じづ^づ
 の^の中^{ちゆう}あ^あら^らの^のま^まど^どあ^あと^とよ^よら^らく^くさ^さく^く人^{にん}の^の中^{ちゆう}に^にも^も其^{その}方^{かた}れ^れと^と
 じ^じん^{じん}の^のつ^つま^まを^をい^いひ^ひて^ては^はあ^あく^くう^うと^とま^まく^くら^らみ^み成^{なり}残^{のこ}と^と也^や
 よ^より^り后^ご々^々蝨^し蠱^ぐ毛^{もう}詩^し乃^の喻^よめ^めの^の物^{もの}移^{うつ}る^るも^も志^しづ^づめ^めと^とあ^あら^ら
 事^{こと}一^{いつ}本^{ほん}文^{ぶん}よ^よら^らく^くら^らり^りう^う種^{しゆ}れ^れえ^え悲^{かな}び^びの^のま^まど^ど天^{てん}曆^{りき}女^{によ}
九名歎詩女内歎段詩母 小一系た女内歎詩母定女
 涉^{せつ}安^{あん}子^し皇^{こう}后^ご官^{くわん}ハ^ハ宣^{せん}耀^{ぎやう}殿^{てん}の^の女^{によ}泣^なを^をと^とね^ねと^と泣^なて^てあ^あら^らか

ら^らぬ^ぬ泣^なく^くる^るま^まい^い方^{かた}も^もあ^あら^らみ^みて^て泣^なせ^せう^うど^どの^の悲^{かな}を^をま^まど^どに^に
 こ^こゆ^ゆり^り泣^ない^いま^まる^るや^や又^{また}陸^{りく}家^か大^{だい}納^{なつ}言^{げん}ハ^ハ雅^や俗^{ぞく}之^之乃^の泣^な女^{によ}の^の人^{にん}
伊周公 中国の道隆子 衣所教實純王子
 係^{けい}同^{どう}三^{さん}句^くの^の語^ごよ^よら^らく^くた^たは^は皇^{こう}后^ご射^{しゃ}す^する^る間^ま足^{あし}身^みを^をあ^あ
るぎ流^{りゆう}衆^{しゆう}と^と我^{われ}泣^なく^くる^る此^{こゝ}道^{だう}り^りか^かめ^めて^てい^い悲^{かな}え^えざ^ざり^り事^{こと}あ^あら^らか
るぎ沿^りく^くざ^ざり^りく^くら^ら委^い世^せ継^{けい}り^りも^も
重内女侍毎貞信公侍女天曆女侍
 祈^{いの}宮^{みや}女^{によ}侍^し長^{ちやう}岡^{おか}と^とい^いふ^ふ一^{いつ}の^のあ^あら^らく^く泣^なく^くる^るま^まど^どに^に
 ざ^ざら^らく^くる^るは^はあ^あの^の涙^{なみだ}あ^あら^らく^くて^て内^{うち}より
 何^{なに}れ^れの^のま^まど^ど編^ひむ^むの^のま^まど^どを^をい^いふ^ふま^まど^どに^にあ^あら^らく^く泣^なく^くる^るま^まど^どに^に
 泣^な返^{へん}ま^ます^す
 い^いふ^ふま^まど^どに^にあ^あら^らく^く泣^なく^くる^るま^まど^どに^にあ^あら^らく^く泣^なく^くる^るま^まど^どに^にあ^あら^らく^く泣^なく^くる^る

是の我身なりはあはれなる物なりとちなむとせざらんはなは
 后なつかをば秋の宮やアノ編つむぎをききつゝさきほかたきりし
 事をし上のりりなきれもは此奇なり后とのぞきをきき
 色あつと世人もあはれにして彼は集あはみのぞうれはゆる
 とぞ此これの實まことの物なりといはあはれなる事なり此の事
 かなとあり

五 直平は皇太子を三つし
 直平ちひら子こ院いんよは息いきあかあしほげりいそくはなきあり

河かわ魚うし院いん乃なりと命いのちあつと後ごよいでりてけくもまわいて
はるかに皇太子を三つし
 系けい極ごく也なり所ところしところとの具ぐもそつてつてき経つらり
 雲うみの事ことかろふとゆきき経つられりたつとちのかう

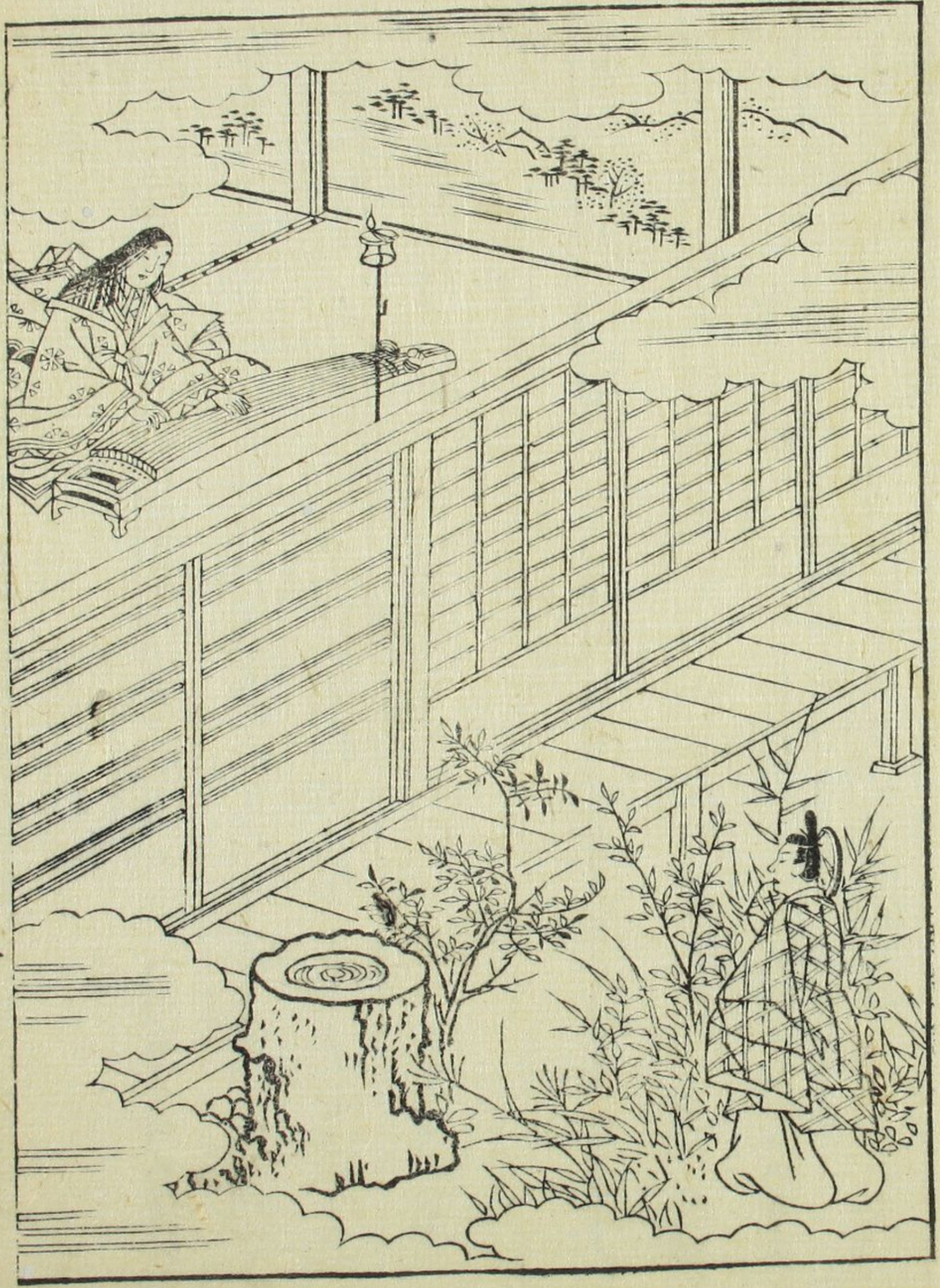
けつぐりまきたとだがりあり殿上人だんなかどよきてあはれ
 いて面かみ向むかはぬはけつとどらぬ後ごでげんかどきて
 足あしあつとに文ふみをかんにしむとびけつとろろあきそとにげ

母ははにわらねたつものに成なりたるのよらうらの言ことをたれ
 との終はつつら路みちをきとあはれなるうきとなきがゆみげりあり
 とてゆるおととえきとどらとらりあはれゆかちつらどといさ
 らせやきもあはれどらゆにのてきげりしつりは後ごよりい
 しつとそそきもきもよ品なま后ごとゆきえたる后ごの殿だん主人しゅじんを
 りいしつとつりちりさつとつらうきつとつらきありねは
 とさよれはげるとどつとつらゆきて次つぎに人ひとの報あやまの

狸とつづー

六 大和國の男ありきり本もとの妻とぬをてててりぐり
こ女むすめぬしんく月つきはふれど此妻この妻秘ひそにりる氣き色いろのぬく
多おほるさうり秋あきの夜よれけくぐやちぐりたは麻あしは音ねの松まつ
をこげくと本もとの妻つまをすけ給たま中ちゆうへ同どう々ざれが

我われも志こころをゆてそ人ひとい志こころを移うつり今いま社やしろよそに身をたきけ
男おとこうぎりちりて今いまの妻つまとさうり本もとれ妻つまとほり
業わざ平へい中ちゆう将しやうのさる妻つまへ色いろいさうは祈いのちつらきれりさきと
ちくて男おとこれ公こうのぶとくに出いてそちやまけりがねり業わざや
かがへりちりるそ人ひと夜よつてふまてけりてさうりぬくたあ



しる

風吹の仲し向成を田よりやまるとうらむとゆくと
やちがらうら優しやけいこふもあつ也男前裁の中はく
ましく世事とらめむけの外を去るうらむとあんな人をどが
伴も内心如夜奴と作しきまされびつうでうらのをかきして
しわたされどらうらむのせびらうらむといふと

七 朱買長文乃道さちらうらむと家まづらうらむうらむ年は
乃妻信徳といふゆらうらむよ今うらむをこまてせとらむい
わらむとさうらむと別らうらむ其決の年買長志里乃今
誓れち守に成く抄く何被妻國乃民は妻とちらうて買長

うらむといふらむ取く悲し流らうらむやかん

呂尚父が妻曰く家成すみ徳く別らうらむ呂尚父王乃師
とぬくといふらうらむ何被妻うらむ本と本のぶくわん
本とこののぞむ其何く呂尚父桶アうと西あく見
よ水入よやいすまといらうらむをせといふらうらむさ
本の中らうらむ一入といふ何妻らうらむとせうらむあがせ
水らうらむのへ一のんといふ呂尚父云は我う縁つとい
本桶の水成るがせらうらむ何と今又うらむとてうらむと
まんといふらうらむ此本物移らうらむはあつ縁と貪
とらうらむをせむらうらむとらうらむとらうらむと

第九 下傳懸望事

或人云人の心よあなをうりてのまじごとておきよのひとあ
 きあひとて一まにわれ物恨のさた立師とてあそと
 い理運はるもの相違もいぞたゆ来れ旨の愛改りあ
 きてもけりねそあやとあやとあやとあやとあやとあやと
 かねて腹立よりと申くもつとつとつとつとつとつとつと
 べとたつなりぬ物申のらとらとらとらとらとらとらとらと
 ちもよ又とつれとぬにやうて大よ悔と事と出く
 あ也老ふれのかつら事あり命と志たつものい天
 を恨むべとて必知者の人を不恨と戒哉此の事

一 仁和寺大持室持府成就院僧正のいよと阿因梨と

けら比白川の九重持塔侍者かをり持室今度の愛阿
 らぶらねげゆぐんとお幼来もさち終は畏り終やぐん思
 ねとく侍者さげう終て愛約りて何よ成く系極大
 殿乃ゆき息阿因梨とてゆ弟子にてい終るるれ大殿
 也射面の次へ今度れ愛い出法師とぞ終りけりち
 とのひてよると終り終るれば作らまやうんさ方わく
 ては眼り成終よりり持室に彼阿因梨のん口惜
 やらんと胸ふとさがるもさ食けるふ其自悔つと
 足くざるとけさびらるるんあ終りよ出らう又うり先

しよのわすらをうへにせがひ絶へしれなるに日高かりて涉
前よせりけるふあやしくも念せいつくゆくゆるれらるるはる
ぶやとゆきしれたれば新法眼の中はゆるゆるゆるとあ
まえてけるもさうさうさうけりまきあうりたり清浄さ
しんもあつなせがひけさば令だうそ越へまはるる
次この勅書あましくゆづりて傍まで成る鳥羽院の
中河いつさかむけとさるるれば世に我もあては法師
國白とゆていつれ終るりいふうらるる人も

② 六条源理太史歌季のあまれば方々ありの所あり
善法寺隠徑乃石中并於任録の事
館れとあ義定とあむげあつといりあまれば理をたれば

院の中はまたちかくゆれが好むとさう終るるとさうしあ
うとあまきまはるるをたればあつれくさるる院中
あつ終るりけるふ困るりける耐通く免しよせてはあ
東國のたわらみ今もあつたればは惜しやあつて
らきあ終るる長きあつりけるふななくさるる終るる我理を
うとあのかうとあつたるる終るるくりあつては終る
我思の終るるさうとあつたるるせよかや作らるるたれば
ふにあやあつたるるさうとあつたるる物りさるるたれば
あつたるるかこあつたるるさうとあつたるる國とあつたるる
いふ此あつたるるさうとあつたるる義定は終るる令終るるあつたるる

ト彼がいつともまじわらぬ程までいつともまじり義老は
あつたの中をみるやむかしの者也安らげむらんすに夜
中のゆきも大踏通つるやむかしの者もつらむらひを
せんともまじれむとのまがなむらひもつらむらひの
や身のまじりもむかしの者もつらむらひの
つらむらひもむかしの者もつらむらひの
ゆかちてまじらんやむかしの者もつらむらひの
ふも是れはむかしの者もつらむらひの
義老もつらむらひの者もつらむらひの
義老とまじらんやむかしの者もつらむらひの

かゝる殿の何事にもむかしの者もつらむらひの
むかしの者もつらむらひの者もつらむらひの
此の理のつらむらひの者もつらむらひの
の思ふつらむらひの者もつらむらひの
あれが實にむかしの者もつらむらひの
乞文と書きてつらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの
つらむらひの者もつらむらひの



まづきとて刑部殿随々まづきは侍りしとていざいざいざ身みを
 とれまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり
 胸むねづれて院いんの清きよ恩おんをゆくまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり
 あはれまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり
 人の目めけしきまみどやまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり
 をまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり

伊予 九條師輔

右府定方 四府高藤 孫

三 一條攝政さうげん和言わごんの任たごりまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり
 其間まめ付つてとあはれまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり
 殿とのまつてまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり
 言ことはまじざうらり思おもはせし間まめ付つてとあはれまじざうらり

得業のころの納言らも時放言をくつぐも貴人
 昇進我も位なりとけりあつて入給ふり相成
 うらむその門をめて車に乗りて先客と車にちり入
 られり被くころは成めりけし無事と成り攝政つめは
 ろいぬ一系攝政乃子孫相成の無事と入らるるこ
 条東洞院とぞゆきて恨ふらるるける業業の因より
 かくとせ

堀河園白兼通侍子 三條院前ま 号堀河女侍 弘光女
 四 弘光女長女一系院の女侍ありしよらては園園白
 を恨まりて悪毒とめて一夜は内めりてくま白髪と成
 給ふんこそいとおそろしけき被雲凌のたつちをけり

願ふ愛だけんよの恨いあつづるもなり

五 藤信民部卿宰相の才幹とありしよらて是れ誠信
 の君公越く申納言め成給へに後任我身のうたを
 指當る恨よきと口惜と心給つりけるや七白と
 けりぬめ死よりぬふざりて失給るるがさるるや
 けよらとせん指の爪皆甲へぬりたるをせりしころ
 給る帝主たりぬ給て其例とありぬあつるか
 くれりかぶとさういひおそろし
 三條院女長公教これけり實綱申納言弟の老を實実之房
 三條院女長公越くして

いふにいついふにわづらひてさうやゆまの秋の存よ
おとよみ給ふんはねいほくをせがむく先くけあたのふ
おんはわらうとた誠信の目前一悪趣の報と感せし
結もやういれくせはまゆま

⑥ 歌臺中絶言のつひに罷あて配不れ月夜んむやといふれ
うらたの似給いど能善知識の次とえあぐり身とてし
くかしくとて無益の事う思のこちだ實業が雷也
ちり清和の帝身は華経を悪極は細向さく恨の
うらまあ也

⑦ 後江相公の陸明女をうけて後世に訪もくろ親文よ

悲之亦悲莫悲於老後子恨之更恨莫恨
於少先親

とかもあはれ後相遠の恨おふはせりてさうまがさく
あふれはさき江滝が恨の賦し平原よ人れかどね有
莫草草骨ふゆくう格本魂とやさひ人まらんたれ
て天道寧ろ倫さんや僕もゆより恨らる人もな難く
事やまばきさういふ人の恨もうけてあつとああわ
はらそつひくわらへるまきさうのこちだ唐帝は楊貴妃
お別し恨の長恨可くそ文もよゆらてまの漢宮も
書まらんとくはねいほくをせがむく先くけあたのふ

夢にみれば此恨長く方て消る期かるとも樂府の
まこといはずは海くぞ聞えく井とて妹背の中れはあさ
つねなきまづいついほくづらに整いぬわぬ夕ぐれ空
あく交ひののり夢もすころうきくわぬぬ名所の曉
のそれ恨よいつむらん鳥れ音さうらりし是傳り愛
着せ死の業をいれども本名をぬ身の習を此恨り
まづい難き今ねをさるべなき傾城のまにわぬぢ
来希いごと
⑧ 柝人間の八苦の中の一は怒憎今吾くいつの物ぬ
あつと也國を大たれをさるれ終りといひんやうの

次下とや志ればく物のまのまの事世のあひぢか
心あてゆくいちてあつらん理とくうんは指す名の
出まらうさうのいなるのまにあつらひ司とのがれて
へこより家路捨て都とあつる難あり其道をさるて
爾る物の中へ浮生の栄花はもてまてわぬわぬ
されい志らうんさ善知識大悟ぶさの身にほろかに
うそとあつられば恨い未と通くも後悔志らふ備
して或い今交世よあ整うはあつらひさ新粉川乃
ふれらうんはう帰るあつらひ人まうはれよら
あつらひらんはけつちあつらひあつらひあつらひ

くうせがけりるんちあくめしめしんちあもがはしくさる
そちしめやうりけのしんちあもがはしくさる
紫の巻は身をとり公のけしんちあもがはしくさる
とよめちあせげのしんちあもがはしくさる

橋正通延勢子が身の沈める事と悟く異國いこくへちあもがはしくさる
具平親王をた作文序書くりるふ是公のまじりともや
井のい事き

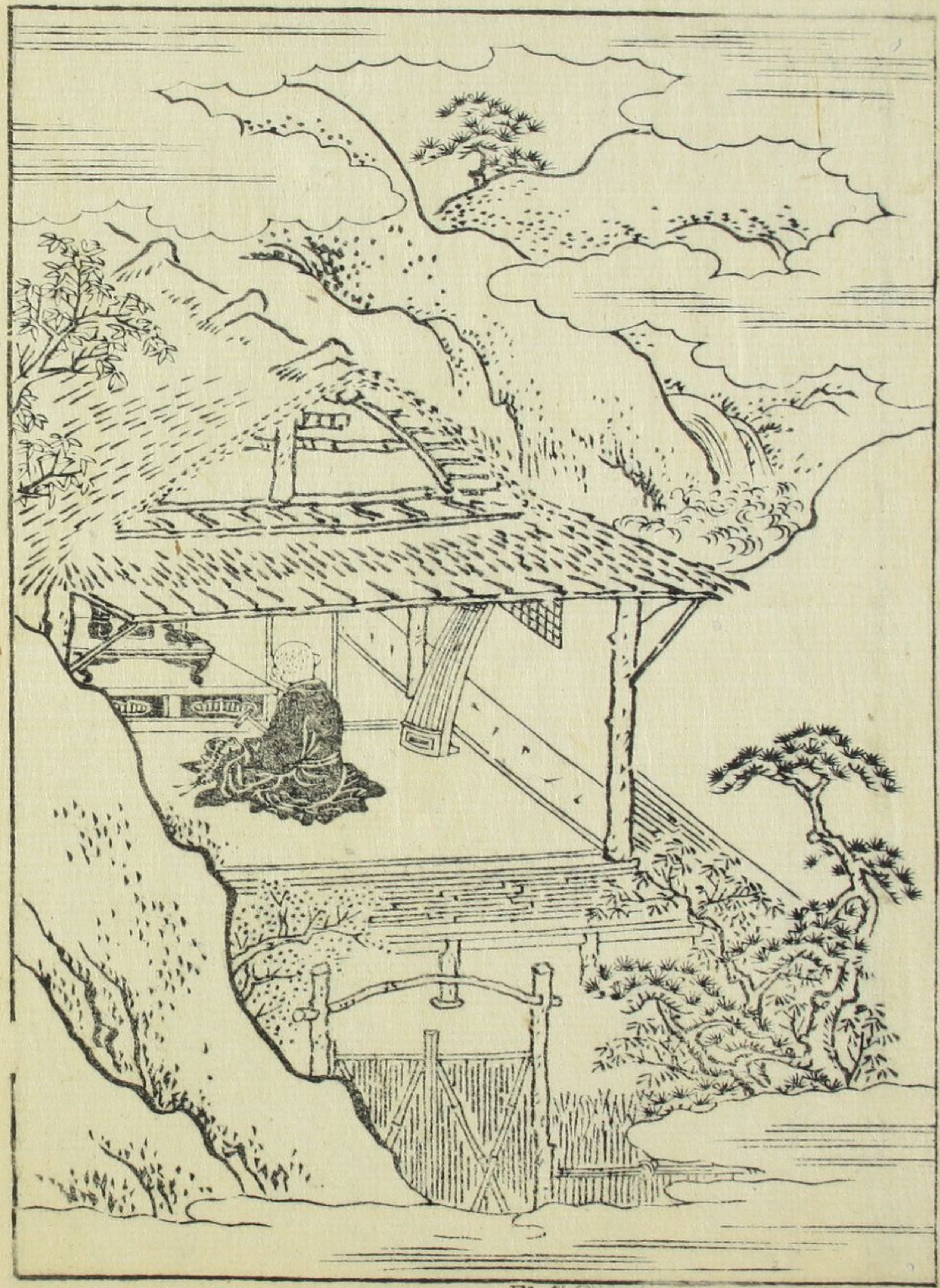
齡とし亞あ顔かほ興きよう適たて三代さんだい而猶なほ沈しん恨こん同どう伯はく寧ねい弄ろう五ご噫い
而將なほ去く

とせりもは源為憲げんゑいを世をよ依けるが此の公あの中

正通思ただとむ公こうありて仕つかまつまりや尸しかばねけしむはらとがを細こまくやさひ
くん源げんとわがもりけりしゆらも出でるまにまにいもいもをを終はらへて終はら
あら世よ公こうのしんちあもがはしくさる
くわんれ也なりのしんちあもがはしくさる

九く進しんは鴨かひ社の氏うぢ人ひとは南なん方ほう丈ぢやう長ぢやう明めいといふ悪あく劣りやくなりなり和わ奇きの友とも
結むす乃すなは道人だうじんよ知しれりる社しゃ司し公こうらまけるがけいさるもあはれ
代しろをを悟さとくく也なり也なりては同どうぐ先ま立たて世よ公こうのしんちあもがはしくさる
いしゆりも

いほより人の入いるゆもあ秋あきも吹ふく道みちよりそこ
ゆも恨うらみのむちやうの迷まよひをこし



ちるべしを海への道へ入ると云ふは生れ涅槃と同一の煩
 悩并^{おぼ}特一也けらあとりつらうのほろとたりとそむき此人は
 一は^{おつり}大魚に似たり方丈記とそりかたり書きおとすれは
 始^{はじ}乃^の詞^{ことば}より河のながれに絶^とてあつてもその水にあらざり
 川^{文選} 閼^{文選}水^{文選}以^{文選}成^{文選}川^{文選}水^{文選}滴^{文選}々^{文選}而^{文選}日^{文選}度^{文選}世^{文選}閼^{文選}人^{文選}
 而^{文選}為^{文選}世^{文選}人^{文選}舟^{文選}々^{文選}而^{文選}行^{文選}暮^{文選}
 と云ふをかあつてわらひしあつて表るれ然而被^つ庵
 おもつてあつての程^{ほど}習^しなむ成^{なる}付^りる念佛^{ねんぶつ}れい^いなむか
 の糸^{いと}針^{はり}のすゝいをせよいすてざりけるをせよすたの程い
 とやうなれうのいらぬものおとす物^{もの}奇^き人の奇^き人^{ひと}もはつて

由成後鳥羽院より作す終焉也

況んば公はつづの浦はよよせりやよらんわすれ終焉
なりて終つて龜居してやよらん世に人をも恨むる
やぶかむびくこ世のわすれりやよらん

⑩ 大納言字通々息 伊通公系議乃阿大治五年十月五日の除目小番後四

人師頼 俊房 公息 長實 俊房 公息 宗輔 俊房 公息 師時 俊房 公息 号中納言に

任と恩寄位次乃上福也と云々伊通其恨よきと云

宰相右兵衛督中宮左大臣の官と辞して柵欄毛草干弘

大宮面より出でて被りて了る緇水干にさよとの袴着て

馬よりつて神崎に去るなり人共いへり人々の官也

カレ後者よきゆ也又年は惜もと云はれりける荷給
乃らと中院入道大臣長れり人返り中とて

八年と云ふおしるものじ持らるる紙みては縁いあはる
何れを思ふと云は持らるる紙と云ふと云はせあは

くても終れば此返寄れおとく程なく長兼二年九月末年
相より中納言小みさしより中納言隆國前中納言

より大納言と成例とぞとのら打つて貴昇進して古
政大臣までのがり終りて是の世に今があらうなり

ついでと云うゆ人也くやれやあはれまはる事なれば
今のうらわら歎きまはびあはるるべし二條院後成



が
奇
一

夏も初春のゆらやまのさだにうらふみ世世の宿りては
あよめふあとりりぬる人ほよわ

